科目区分：自由選択
授業科目名：海外教育実践体験実習

UWB 多文化共生研修の発展

所属・氏名：英語教育講座　立松大祐

１．はじめに

今日の教師に求められる資質の一つに急速に広がるグローバル社会へと対応できる資質があり，それは多様なものの見方，考え方ができること，違いを理解し尊重しようとする姿勢，理解と尊重を生み出すためのコミュニケーション力を意味していると思われる。法務省の在留外国人統計（2017 年 12 月）では，250 万人以上が在留しており，保・幼・小・中・高等学校の教室においても外国につながりのある子どもの人数は増加していると考えられる。大学においてもグローバル人材の育成を目指し，留学生の受け入れや派遣に力が入れられている。

このような情勢から，地球的視野に立って，多様性を理解・尊重する精神を備え，多様性を社会の活力に変えていくことのできる人材の育成を目的として, 2011 年度から学術交流協定校のワシントン大学バセル校（UWB）に愛媛大学生を派遣している。特に，アメリカ社会の人種，移民，ジェンダー，セクシュアリティを軸とした平等化と多様化への変動や教育の動向を踏まえて，多様性の理解と尊重のための研修を行っている。ここでは，2018 年 3 月 3 日から 18 日に実施した第 7 回目の研修について報告する。

２．主な研修先と研修内容

研修プログラムは参加学生のニーズなどに応じて研修の回数を重ねるごとに少しずつ変化している。ここでは，第 7 回目のプログラム内容を概観して，第 1 回研修から継続して行われている内容と新しい内容を確認し，特徴的な取組の内容を説明する。

表１．主な研修場所

第 7 回（2018 年）研修の主な研修先
第 1 回研修と共通した研修先
- Pike Place Market - Downtown - Pioneer Square - Wing Luke Museum of the Asian Pacific American Experience - Ethnic Cultural Center - Q Center - UW Asian Library - OneWorld Now! - Mariner High School - UWB
第 7 回研修で新たに加えた研修先
- Kids4Peace - Real Change - Food Banks (Ballard & University District) - Uwajimaya (Bellevue & Downtown) - Bainbridge Island Historical Museum - UWB Diversity Center
学校訪問と学生交流
- Mariner High School - Chief Sealth High School - UWB Japanese Class - TOPS K-8 School - UW Ambassadors

１）UWB および UW でのダイバシティ研修

UWB はダイバシティを大学の教育と運営の基盤となる重要な価値と位置づけ，目標達成のためのアクション・プランを制定している。多様性に関連して, 評価と目標の設定, 空間の確保, 研修, 支援サービス，プログラム開発と実施，社会参画への取り組みがあげられている。大学が内包する多様性とは，マイノリティに属する有色人種，留学生，英語力が不十分な学生，女性，子どもを持つ学生，軍務を退役した学生，宗教活動家，移民第一世代, 特別支援を必要とする学生, 不法移民, 性的マイノリティの学生・教職員である。第 7 回の研修では新しく開設された Diversity Center を訪問し，上記の活動方針についての説明を受け，施設の見学を行うことができた。

UW の Q Center は教職員や学生が利用できる施設で利用者にとってアクセスのよい学生会館内に位置している。常駐している担当職員からセンターの目的や LGBTQ 学生・職員を巡る取組について説明を受けた。日に数十人の利用があり，学生は定期的に訪れたり，精神的に疲れて避難所的に訪れたりする状況がある。利用者は相談活動，飲食を含む休憩，自習，啓発活動の計画などをすることができる。

UW の Ethnic Cultural Center はでは様々なエスニシティの学生が自由に懇談し，独自の文化への誇りを共有し，文化活動を行うことのできる個別の部屋，会議室に加え，演劇，音楽演奏，映画上映ができる劇場を提供していた。安心して過ごすことのできる空間がそれぞれの学生が専攻する学問領域への集中，さらに高い専門性の獲得とそこから生まれる新しい創造性につながるという確信をもち運営されている。このセンターで訪問者の支援などの運営を手伝っている学生自身も少数民族出身や留学生であり，マイノリティの学生が主体的に活躍する場となっている。

２）アジア系移民の文化施設訪問

アメリカ社会の多様性理解のために，シアトルのインターナショナル・ディストリクトの Wing Luke Museum of the Asian Pacific American Experience を訪問した。ここは，様々な迫害を克服し，アジア系移民として初めてシアトル市議会議員に選ばれた中国系移民，Wing Luke 氏の功績を記念して建てられた博物館である。日本を含む様々なアジア系移民の歴史，文化，移民の歴史に関する展示物がある。

３）共生社会実現のための取組

第7回研修では次の3つの訪問を行った。まず，Kids4Peace への訪問である。この NPO 団体は，暴力や紛争・戦争に反対し平和な社会を担う子どもたちの育成を行っている。特に，宗教の壁を越え，互いの考え方を受け入れて尊重する態度を重んじており，実際にこの活動に集まる子どもたちの家庭はユダヤ教，キリスト教，イスラム教を背景としている。次に，OneWorld Now! は、グローバル社会に通用する次世代の若者育成のためのリーダーシップ教育を主目的としている団体である。最後に Real Change への訪問である。この団体はシアトルで主に低所得者やホームレスの自立支援を行っている。これらは子どもの教育と経済格差や自立支援を学ぶために大変有意義であった。

４）学校訪問と教育実習体験

UWB で開講されている日本語のクラスで日本文化紹介として，事前学習で作成した紹介ビデオを使い愛媛県と愛媛大学の紹介を行った。次に俳句ワークショップに挑戦した。Mariner High School への訪問と一日高校生体験は第 1 回目の研修から学生の評価が高く，現在まで継続しているプログラムである。それぞれの学生にはバディと呼ばれる生徒が 1 人ずつ担当としてつき，そのバディと全く同じ授業を受けて 1 日を過ごすのである。放課後は日本語クラブの活動に参加し，クラブの生徒と交流を行っている。今年度は Chief Sealth International High School の日本語教室の授業観察と生徒との交流，さらに，TOPS K-8 School の小学校２年生の授業での教育実践体験を加えた。これらの体験はアメリカの学校が多様な子どもたちにどのように接しているのかを理解することに役立っている。

５）愛媛フェアへの参加とフードバンクでの活動

愛媛県産業振興課主催による，愛媛の商品を販売する「愛媛フェア」がシアトルの宇和島屋本店とベルビュー店で開催された。学生は同フェアに参加し，商品の紹介，試食，愛媛のキャラクターである「みきゃん」のぬいぐるみに入る等，販売活動の支援を行った。訪れた地元の人々と活発にコミュニケーションをとることができたこと，愛媛の国際化に貢献できたことは学生たちにとって貴重な経験となった。フードバンクでのボランティア活動は新規のプログラムである。フードバンクとは，地元の NPO・NGO 団体が大規模スーパーマーケットなどから品質には問題のない食料品の寄付を受けて備蓄し，経済的に困窮している家庭にそれらを無料で配布する取り組みである。寄付やボランティアなどを通して互いに助け合おうとする姿勢や態度について，実際にボランティア活動をすることによって学ぶことが多かった。学生は生鮮食料品を含む食品の仕分け，袋詰め，接客などの仕事を半日間体験し，フードバンクの仕組みや運営，アメリカに住む人々の多様性などについて学んだ。

６）英語クラス，ホームステイ，UW アンバサダー

第 7 回の研修では，一般的な英会話の内容に加え，ダイバシティプログラムの内容について英語で予習や復習を行うことができるよう全８回の計画で実施した英会話講師と相談し，英会話と研修プログラムの内容を統合した CLIL（内容言語統合型学習）を実施した。

ホームステイは学生 2 人 1 組で現地のホストファミリー宅で行った。各ホストファミリーは少々の言葉の障壁があっても，あいまいさに耐え，学生とのコミュニケーションを図ろうとする受容性も高い。プログラム内容への理解も深く，学生と研修中に学んだことについて語り合おうとする積

極的で協力的な態度で接してくれている。学生にとってはかけがえのない交流となっている。それに加えて，各学生にUWの学生がアンバサダーという名称で関わることになった。学生にとっては，お互いに年齢が近いことが大きなメリットである。アンバサダーの学生はプログラムの一部に参加し，休日にはダウンタウンに出かける等，愛媛大学の学生と友人関係を築いた。帰国後もSNSでお互いの出来事を報告し，アンバサダーであった学生が研修や留学で来日の際には会いに行っている。このような関係を築けたことは大きな財産である。

３．学生のアンケート結果と課題

学生は「行動目標記録用紙」に，プログラム，ホームステイ，その他について個別に具体的な目標を立て，毎日それに対する振り返りを行った。次の例は，英語が分からないことから聴覚障害のある友人の置かれている状況を理解することができたということが報告されている。これはある日の一部の記述であるが，各参加学生は紙幅いっぱいに学んだこと，感じたことや自分の考えを書くことができた。

「ワークショップでは英語で何の話をしているのか分からず，周りの人に迷惑をかけてしまい申し訳なかった。リアルタイムで内容が分からないというのは，コミュニケーションにおいて大きな障害となるのだと切実に感じた。難聴の友人がいつも人と会話をしていて聞き返すのが申し訳ない，大人数だと自分のせいで会話が止まってしまうのがつらい，何の話か分からず話を聞いているのはしんどいと言っていたのを思い出した。私はそんなの聞き返してくれたら嫌な顔せずに教えるのにと思っていたが，そういう問題ではないということを，まさかここで実感することになるとは思わなかった。」

また，研修の最後には，自己目標に対して1（全く達成できなかった），2（あまり達成できなかった），3（どちらかというと達成できた），4（概ね達成できた），5（かなり達成できた）で自己評価を行った。それらをまとめたものが表 1 である。

表１．研修における自己評価の結果

（N=8）

自己評価	1	2	3	4	5
テーマ	0	0	0	3	5
ホームステイ	0	0	0	2	6
その他	0	0	0	5	3

これらの結果を見ると，本研修について学生それぞれが目標を達成することができたことが分かる。

今後の課題としては，参加する学生のニーズに合わせてプログラム内容を改善し続けることが必要なことである。また，事前・事後学習の充実が欠かせないことである。今回の研修では 12 回の事前学習を行っている。現地での学習を効果的に行うためには必要であるが，参加学生の所属や回生の違いにより日程を調整することが難しいこともある。さらに，現在はJASSOと愛媛大学学生海外派遣研修（短期）の奨学金を得ているが，継続的な経済的支援の獲得が大きな課題である。

４．「地域社会を核とした教育と研究のつながり」

ダイバシティを学び，知識とスキルを獲得することを目的とした本プログラムは，地域の多様性への対応，学校教育や生涯学習活動において中心的指導的な役割を果たし，豊かな地域文化の創出と推進に貢献できる人材を育成することができている。地域や学校における国際理解及び国際交流のための諸活動の実践において，中心的な役割を果たし得る人材育成のためさらなる努力を続けたい。